

埼玉県本庄市

# 女堀遺跡群発掘調査概報

本庄市教育委員会

# 序

明治初年、元老院議官佐野常民氏の遷都意見書によると、「本荘（庄）駅ハ土地高敞ニシテ眺望ニ良ク 氣候寒カラス水運ノ利以テ開ク可シ 是レ最モ其所ヲ得タリトス」「其土質赤埴ニシテ砂ヲ交ヘ 稲梁ニ宜ク又桑ニ適セリ……………毎戸井ヲ鑿リテ飲ム 井ノ深サ三丈許水極メテ清冷ナリ……………風景ノ勝水土ノ宜キ此ノ如シ 其人身ノ健康ヲ保スル復疑ヲ容レス」として 本庄が日本の首都として最も適当な場所であることを強調されています。こうした文献からも、本庄は太古より住みよいところとして、多くの先人たちが居住した場所であったことが想像されます。したがって本庄は、文化財の宝庫といわれるように、たくさんの遺跡が散在しております。

時代の進展にともない、開発事業が進み、とくに、上越新幹線、関越高速道路等の開発事業が着々と進行しております。

これらの開発事業と、文化財保護事業の調整を図りながら、貴重な文化遺産を損うことなく、またこれを正確に記録して後世に伝えるべく、遺跡群発掘調査を鋭意進めております。

今回、女堀遺跡群発掘調査を、県教委文化財保護課の早川智明先生、さきたま資料館の小川良祐先生、本庄高校の菅谷浩之先生はじめ、多くの先生方のご指導をいただき、文化財保護審議委員のみなさんのご協力のもとに、本庄市教委職員の長谷川勇君、加藤忠行君、反町光弘君、明治大学の岸隆雄君が、多くの作業員のみなさんとともに発掘作業にあたってくれました。

夏の炎天下汗を流し、冬の空っ風に身をさらし、泥にまみれて、たいへんな苦勞を重ねた結果、一応所期の事業の終了をみましたので、ここに概要をとりまとめました。

繁忙の中に作成いたしましたので、不備の点もあるかと思いますが、ご叱正いただければ幸甚に存じます。

御指導いただいた先生方、作業に従事されたみなさん、なにかと温いご配慮をいただいた地元のみなさんはじめ、たくさんの関係者の各位に、心からのお礼を申しあげて、ごあいさついたします。

昭和54年3月25日

本庄市教育委員会教育長

飯島 彰

## 例 言

1. 本書は本庄市教育委員会が実施した女堀遺跡群発掘調査概報である。
2. 発掘調査は国庫補助を得て総予算10,355,690円、内訳は国庫5,000,000円、県2,5000,000円の補助金、市が2,855,690円で実施した。
3. 発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者 本庄市教育委員会  
教育長 飯島 彰  
社会教育課  
課長 島田徳三  
課長補佐 高村真三 (54.1.1より)  
係長 新井栄治 (53.12.31まで)  
主任 小林弘子  
係 揖斐龍一  
長谷川勇  
反町光弘  
加藤忠行

調査担当者 長谷川勇  
調査補助員 岸 隆雄 (明治大学)  
作業員 地域住民延2080名

4. 出土品の整理、図版の作成、本書の執筆、編集は担当者と反町光弘、岸隆雄の3名が当たった。

# 目 次

序  
例言  
目次

発掘調査の契機と経過	1
遺跡の立地環境	2
遺構と遺物	4
調査のまとめ	11

## 挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	3
第 2 図	笠ヶ谷戸遺跡 5 0 街区 3 号住居址実測図	5
第 3 図	笠ヶ谷戸遺跡 5 0 街区 3 号住居址遺物出土状況	6
第 4 図	笠ヶ谷戸遺跡 5 0 街区 3 号住居址出土遺物実測図	7
第 5 図	笠ヶ谷戸遺跡 5 0 街区 3 号住居址出土遺物実測図	8

## 写真図版目次

図版 1	調査区域空中写真 5 0 街区 1 号～ 4 号住居址空中写真
図版 2	5 0 街区 3 号住居址全景 5 0 街区 3 号住居址 土器出土状況
図版 3	5 0 街区 3 号住居址 土器出土状況
図版 4	5 0 街区 3 号住居址 鉄鏃出土状況 5 0 街区 3 号住居址 三和土状況
図版 5	5 0 街区 3 号住居址全景 調査風景
図版 6	調査風景
図版 7	5 0 街区 3 号住居址 出土遺物
図版 8	5 0 街区 3 号住居址 出土遺物

## 発掘調査の契機と経過

本庄市には現在170ヶ所余の遺跡が確認されているが、これらの遺跡は集落を中心として、古墳や条里遺構であるが、近年外的要因によって、また内的要因によって変貌を余儀なくされている。

上越新幹線、関越高速道による開発、市の開発事業により、文化財との調整が急務とされている。

かかる現状のなかにあつて、本庄市街地の南部、本庄市字伊丹堂前の全部、字伊丹堂、字見福の一部、大字北堀字二ツ口の全部、字女堀向、字三ツ俣、字笠ヶ谷戸の一部、大字東富田字中道通の全部、字四丁原、字雌漆、字元屋敷の一部、大字西富田字東畑の一部の地域にまたがる73ヘクタールが、本庄都市計画事業女堀土地区画整理事業により、健全な市街地を造成するため公共施設を整備改善し宅地の利用増進を目的とした開発が行なわれることになった。

この事業区域内に笠ヶ谷戸遺跡（本庄80号遺跡）、雌漆遺跡（本庄84号遺跡）、伊丹堂前遺跡（本庄81号遺跡）の3ヶ所の遺跡が確認され、近い将来、宅地化が予想されることから、事前の記録保存のための発掘調査を、昭和52年度～同56年度に行うものである。

昭和52年度は、11月16日より、3月31日までの4ヶ月半にわたり、本庄市からの委託によって本庄市遺跡調査会が主体者となり、早川智明、管谷浩之の両氏が調査担当者として、主要街路部分18,000㎡の調査（当初計画15,000㎡・拡張3,000㎡）が行なわれ、笠ヶ谷戸遺跡で約12,000㎡を発掘し、古墳時代住居址3、中世に位置づけられ、旧女堀川と考えられる河川跡や時期不明の溝7、明治9年、地租改正時に作成された地籍図に記載された近世溝の一部などが調査された。

雌漆遺跡では約6,000㎡を発掘し、古墳時代住居2、古墳時代溝1、近世溝1、時期不明ピット群などが調査された。

昭和53年度は全体計画の第2年次にあたり、笠ヶ谷戸遺跡33,000㎡、伊丹堂前遺跡10,000㎡の予定で11月27日調査に入ったが、笠ヶ谷戸遺跡33,000㎡の調査予定区域と、集落址が東に延びると予想されたので2,500㎡を拡張調査を行い、古墳時代住居址8、52年度調査された中世河川跡の流路確認と、溝6、土壙6を調査した。予定された調査区域面積は広かったが、集落は、調査面積の東寄りに一部かかる程度で、分布調査での結果と大きな差異があり、当地域での発掘調査のむずかしさを示し、集落址の中心は、笠ヶ谷戸の集落にあると考えられる。

発掘調査はブルドーザーで抜根後、各街区毎に幅2mのトレンチを2mおきに設定し、遺構の状況を把握しつつ遺構部分の耕作土を除去して調査を行う方法をとった。

調査範囲に予定されていたが集落址が広ろがらないと考えられる地域については2mのトレンチを10mごとに設定したが、遺構は検出できず、遺物も皆無に等しいことから、当初の予定地域から拡張したものである。

## 遺跡の立地と環境

女堀遺跡群は、本庄市街地の南、国鉄高崎線本庄駅の南方約1kmに位置する。遺跡群が所在する本庄台地は、群馬県鬼石町、埼玉県神川村あたりを扇頂とする神流川扇状地の扇端にあたり、東北方向へ傾斜し、中小河川も、この方向にほぼ流下する。遺跡のなかを標高60m等高線が東南方向より西北方向に走る。この扇状地の末端以北は利根川沖積低地となり、利根川にほぼ平行に下流方向へ、傾斜している。この扇状地上には堆積をまぬがれた残丘である浅見山、生野山丘陵があり、この扇状地を本庄段丘と呼ぶ。

今回調査した笠ヶ谷戸遺跡は、女堀川流域に沿い、南1kmに浅見山丘陵（大久保山）があり、その間に男堀川が東流し、水田地帯が広がっている。この女堀川流域には5世紀代に位置づけられる浅見鷺山古墳、入浅見金鑽神社古墳、前山2号墳（注1）、公卿塚古墳（注2）が存在している。

鷺山古墳、金鑽神社古墳は生野山丘陵に、前山2号墳は浅見山丘陵に位置し、公卿塚古墳は男堀川と女堀川にはさまれた自然提防上にあり、笠ヶ谷戸遺跡の南西700mにある。

この本庄台地の神流川流域、利根川沖積低地に沿った台地末端、女堀川流域、身馴川（小山川）流域には後期群集墳が分布している。神流川流域では大御堂古墳群（注3）、四軒在家古墳群、元阿保古墳群、関口古墳群、植竹古墳群、南塚原古墳群（注4）、二宮古墳群（注5）、十二ヶ谷戸古墳群（注6）、城戸野古墳群（注7）、利根川流域には旭小島古墳群、塚合古墳群（注8）、四十坂古墳群、身馴川流域に塚本山古墳群（注9）、生野山古墳群などが分布している。

集落址は、それぞれの古墳群に接して分布し、西1.5kmに西富田新田遺跡（注10）、二本松遺跡、南西約2kmに後張遺跡、約1kmに下田遺跡、南東2kmに古川端遺跡（注11）などがある。

この他女堀川、男堀川流域の水田地帯は、上流地域である児玉町蛭川、浅見あたりから続く糸里遺構がみられ、古墳時代初頭より奈良時代にかけての遺跡が特に多い。

注 1 『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』 昭53 埼玉県教育委員会

注 2 『本庄市史 資料編』 昭51 本庄市

注 3 『大御堂稲荷塚古墳発掘調査報告書』昭44 上里町教育委員会

注 4 『青柳古墳群発掘調査報告書』 昭48 埼玉県遺跡調査会

注 5 注4に同じ

注 6 注4に同じ

注 7 注4に同じ

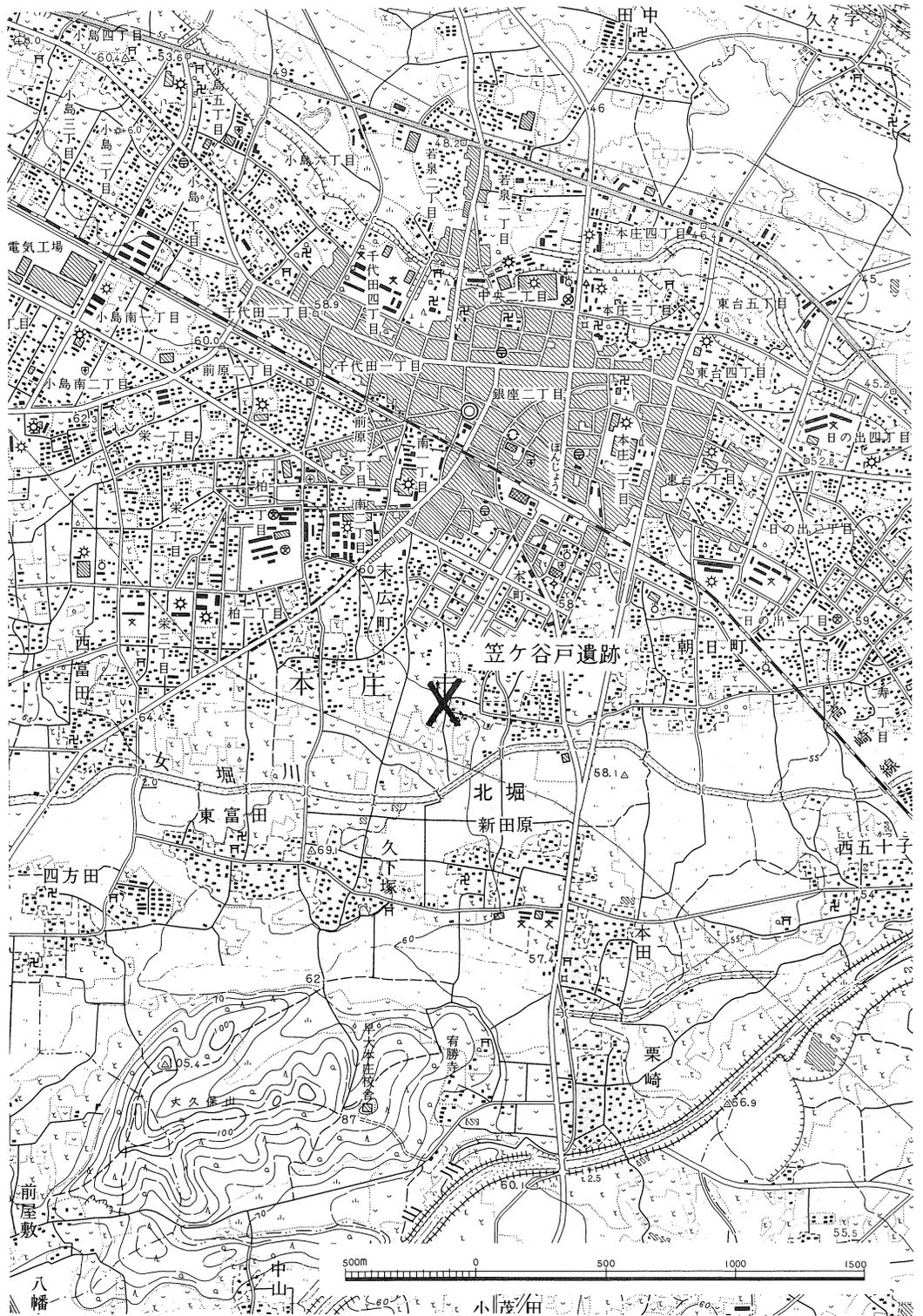
注 8 『本庄市塚合古墳調査報告書』 昭44 本庄市教育委員会

注 9 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ』 昭52 埼玉県教育委員会

注10 『本庄市史、資料編』 昭51 本庄市

注11 注1に同じ

第1図 位置図



## 遺構と遺物

遺構については、古墳時代住居址 8、溝 6、中世河川跡 1、土壌 6 が検出された。

### 古墳時代住居址

#### 150 街区 3 号住居址と遺物

ほぼ正方形プランの 5.4m × 5.6m、壁はほぼ垂直に掘られており、壁高は丹念に検出したにもかかわらず 22～36cm と不定である。これは耕土が浅く壁上部が既に攪乱を受けていることによると考えられる。地表下 20cm で遺構の確認ができた部分もある。

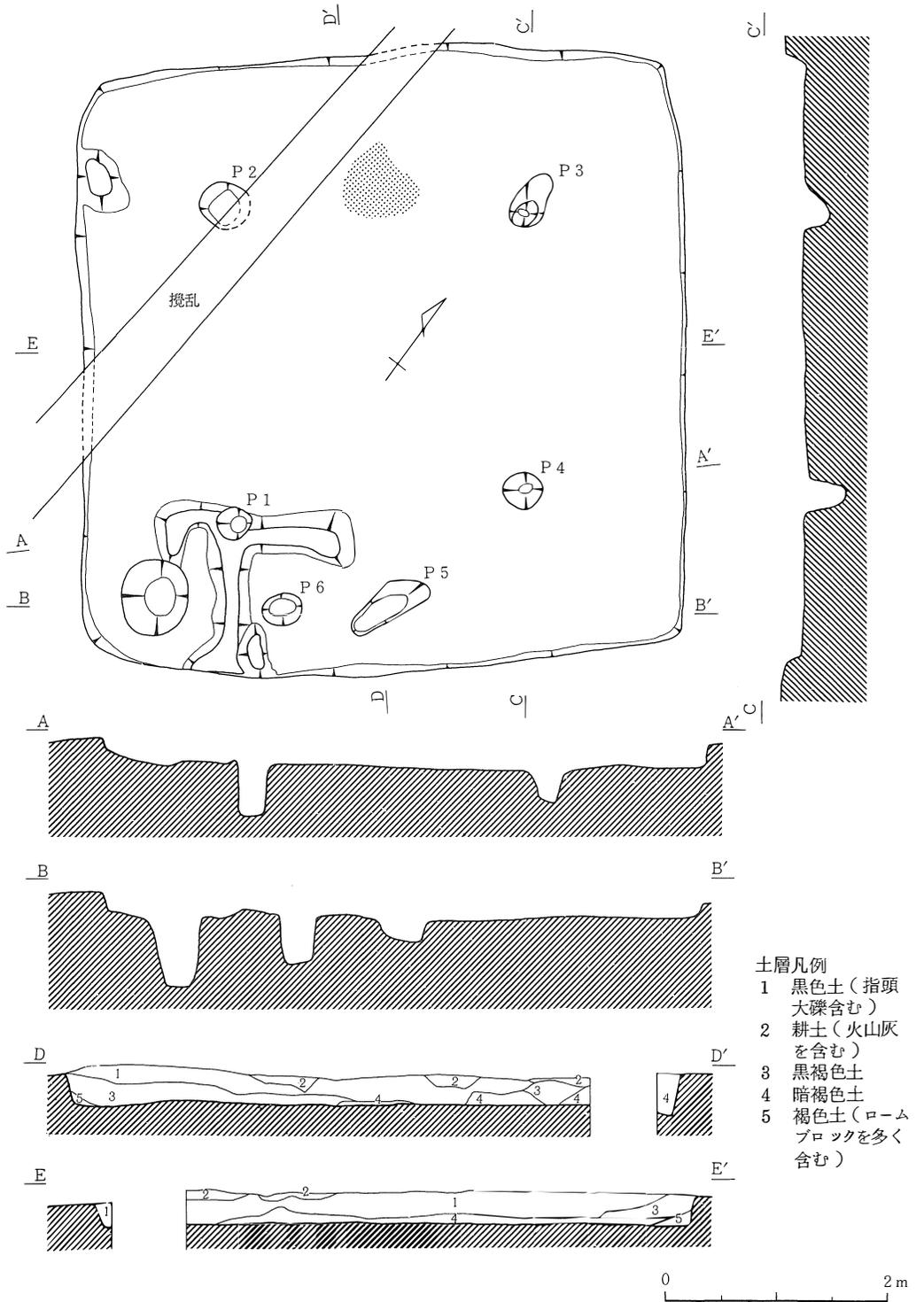
覆土の上部と壁の上部の区別は困難であったので、当初床面を検出してから壁を追ってプランを検出した。床面はハードローム層を 5～10cm ほど掘り下げている。床面は 4ヶ所の柱穴の範囲内に不整形な三和土がひろがり、小豆大礫を混入し、固く踏みしめられている。柱穴はほぼ対角線上に 4ヶ所 (P 1～P 4) 検出され、深さは 48cm (P 1)～54cm (P 2)、P 5、P 6 は後世の攪乱と考えられ P 4 も野ネズミの巣となり明瞭ではない。南隅寄りに 68cm × 60cm、深さ 60cm の貯蔵穴が検出され、その貯蔵穴をとりかこむように壁から高さ 6cm の T 字状凸帯が認められる。柱穴 P 1 は、この凸帯上から掘り下げられ、凸帯は小豆大礫を含み、三和土のように固くしまっている。

凸帯と壁の接する東側と西隅付近に生粘土が認められ、住居址中央北寄りに少量の焼土を含んだ黒色土が三和土の上にマウンド状となっていたが遺構には結びつかず、土製片が検出された。

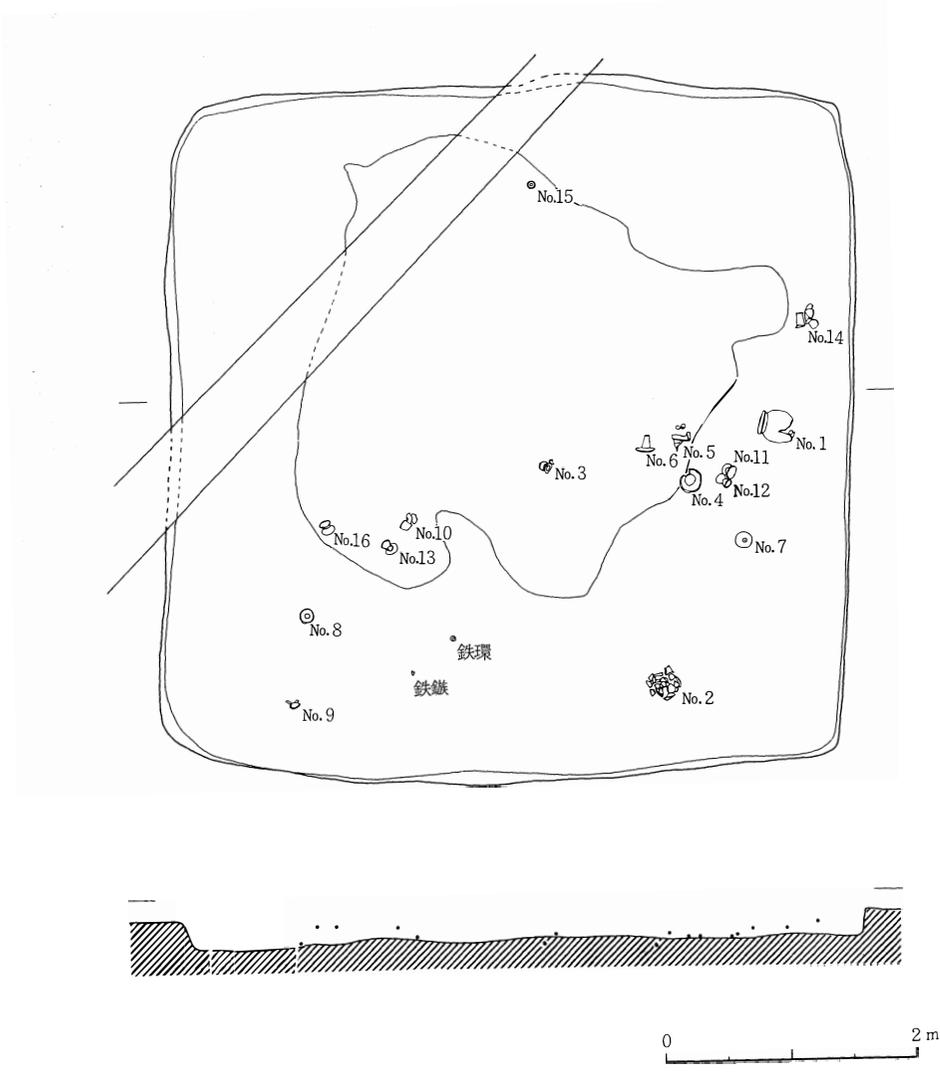
炉あるいはカマドは検出されず町道のあった部分はガス管理設によってすでに破壊されていた。

出土遺物は甕 3、高杯 5、埴 8、鉢 1、その他破片と鉄鏃 1、鉄環 1 がある。出土状況については第 3 図に示した。

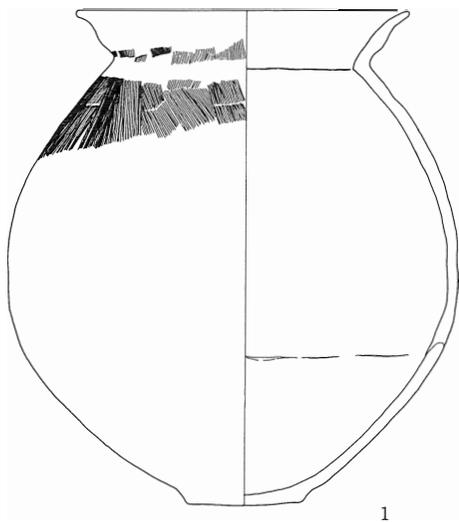
第2図 笠ヶ谷戸遺跡50街区3号住居址実測図



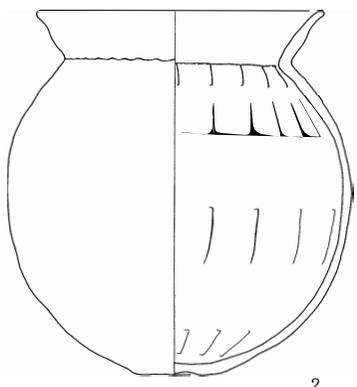
第3図 笠ヶ谷戸遺跡50街区3号住居址遺物出土状況



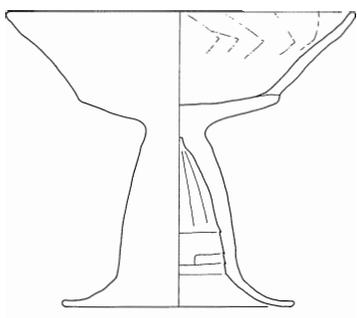
第4図 笠ヶ谷戸遺跡50街区3号住居址出土遺物実測図



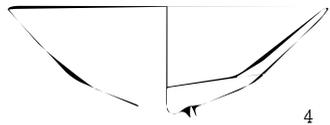
1



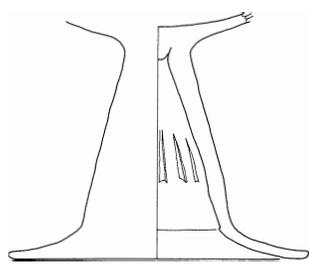
2



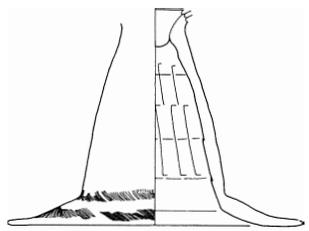
3



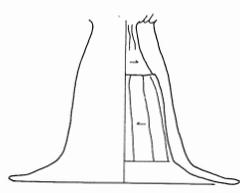
4



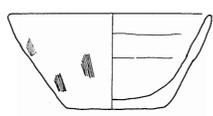
5



6



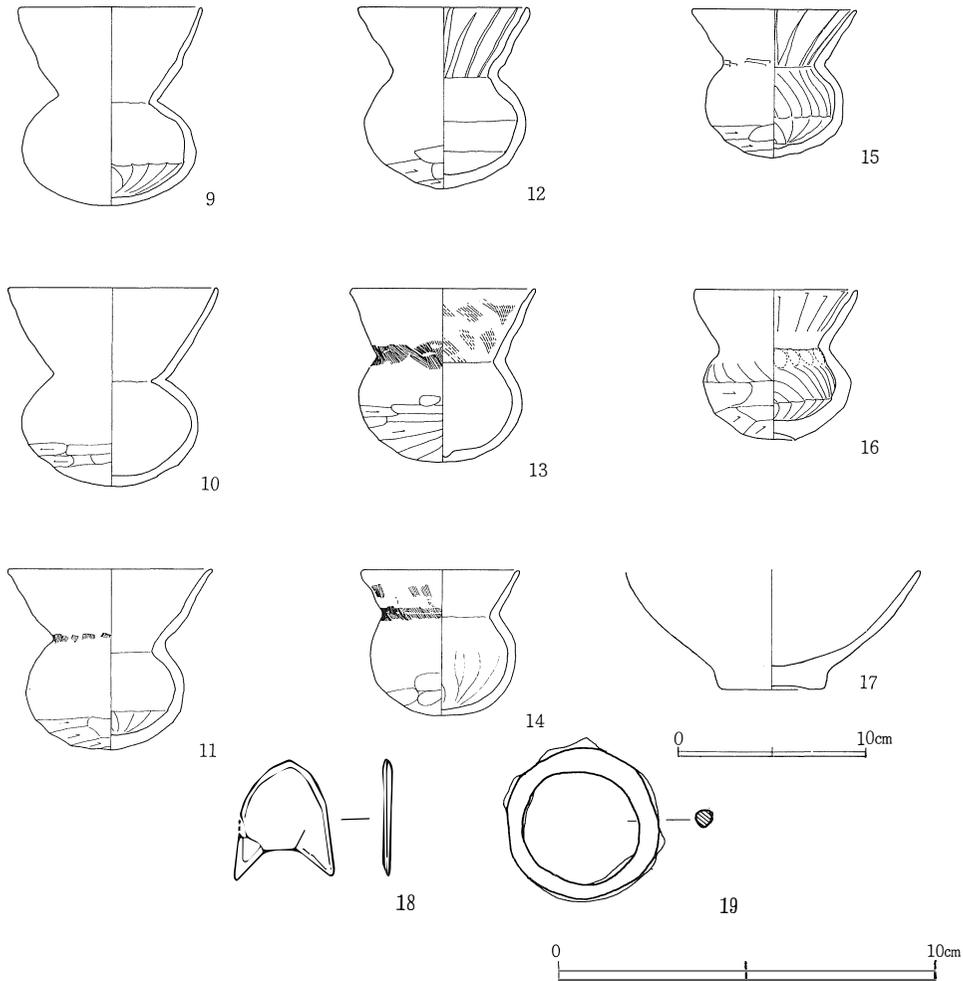
7



8



第5図 笠ヶ谷遺跡50街区3号住居址出土遺物実測図



50街区3号住居址出土遺物（第4～5図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	1	口径 17.7 器高 26.3	口縁部は外反して開き、中央部肥厚、胴部は最大径が中央にあり底部は平底。	口縁部、横ナデ、胴部上半細かいハケ整形後、篋削り、下半篋削り	底部 $\frac{1}{2}$ 欠 胴部 $\frac{1}{2}$ 欠
甕	2	口径 15.3 器高 19.4	口縁部は外反して開き、中央部肥厚、口縁貼付部指圧痕、胴部球形くぼみ底	口縁部、横ナデ、胴部篋削り、内面篋削り。	完形 淡赤褐色
高杯	3	口径 18.7 器高 15.8 底径 12.4	杯底部に陵を残し、接合痕明瞭	杯部内面篋ケズリ後横ナデ 口縁横ナデ、脚部内面輪積痕、脚端部横ナデ。	脚端部 $\frac{1}{2}$ 残 赤褐色
高杯	4	口径 17.0	杯部底部接合痕明瞭、天井部凸状粘土。	口縁部横ナデ	脚部欠 暗赤褐色

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
高杯	5	底径 15.8	脚部内面接合痕、天井部凸状粘土脚部粘土絞りそのため内面がくぼむ。	脚端部横ナデ	脚部欠 暗赤褐色
高杯	6	底径 15.7	天井部凸状粘土、内面接合痕明瞭	脚部下端ハケ、一部ナデ消される脚部内面篋削り。	杯部欠 赤褐色
高杯	7	底径 12.4	内面接合痕明瞭	脚端ナデ、内面上部絞り以下篋削り	杯部欠 赤褐色
鉢	8	口径 10.9 器高 5.1 底径 5.2	底部平面、内面輪積痕明瞭	器面ハケ整形後ナデ	完形 淡黄褐色
埴	9	口径 9.6 器高 10.5	口縁部中央に陵、底部丸底、内面接合痕明瞭	口縁部横ナデ、内面接合痕下指ナデ上げおうとつが目立つ。	口縁部欠 暗赤褐色
埴	10	口径 11.0 器高 10.5	口縁部内彎して開き、きつくくびれる、胴部接合部に陵をなす。底部丸底。	口縁部横ナデ、胴下半を篋削り。	完形 暗赤褐色
埴	11	口径 10.8 器高 9.5	底部丸底、胴部内面に接合痕が一部残る。	口縁部横ナデ、胴下半を篋削り、胴部内面接合痕下を指でナデ上げ頸部にハケが残る。	口縁部欠 暗赤褐色
埴	12	口径 9.0 器高 9.6	底部丸底、内面接合痕明瞭	口縁部横ナデ、内面に暗文、胴部接合痕下を指でナデ上げ、胴部下半を篋削り。	完形 暗赤褐色
埴	13	口径 9.8 器高 9.2	底部丸底、頸部が大きく、内面底部は凹状。	口縁部横ナデ、内面にハケが残る頸部にハケ、胴下半篋削り。	完形 暗赤褐色
埴	14	口径 8.7 器高 7.7	口縁部短い、底部丸底	口縁部ハケ整形後横ナデ、頸部にハケ残る、胴内面下半を指でナデ上げ、胴下半を篋削り。	口縁部欠 淡黄褐色
埴	15	口径 8.7 器高 7.9	底部丸底、内面接合痕明瞭	口縁部横ナデ、内面に暗文、胴部接合痕下と上部を指でナデ上る、口縁部頸部付近を篋削りし、胴部下半を篋削り。	完形 暗赤褐色
埴	16	口径 8.5 器高 8.0 底径 2.0	底部くぼみ底、内面接合痕明瞭、	口縁部横ナデ、内面篋削り、胴部接合痕下と上部を指でナデ上げ、胴部内面上部に指圧痕、胴部下半を篋削り。	完形 暗赤褐色
甕	17	底径 5.5	底部くぼみ底、接合部凝口縁状		内面、赤褐色器面、スス付着

#### 鉄鏃（第5図）

篋被をもたない両丸造三角鏃で、長さ3.1cm、最大幅は尾の端にあり2.6cm、厚さは0.2cm、先端は鈍角で腸袂をもつ。身の先端より尾にかけて陵をもっている。

#### 鉄環（第5図）

直径0.5cmほどの金棒を径4cmに、ほぼ円形にまるめたもので、銹化膨張、剝離が著しく塊状とはならない。

#### 溝

溝は6本検出され、調査区域が広く調査のできない部分もあったが、古墳時代に伴う溝5本、近世の溝1本と考えられる。

集落と同時期とみられる幅28.8cm、深さ7.5cmの溝は河川に切られており、前回調査の5号溝と続くと考えられ、ほぼ河川跡に併行して検出された。

その他の溝からは集落と同時期の土器片が検出され、全く遺物のみられない溝を近世の溝とした。

#### 中世河川跡

昭和52年度の調査で幅1.6m、長さ200mにわたって、3200㎡を発掘し蛇行した河川跡を検出したが、今回は前年の調査区域から外れ、蛇行した河川跡右岸の状況調査と、流路の方向と、川幅の確認のための調査を行った。

#### 土壌

土壌は6ヶ所で検出され、その他調査区域内に現代のサツマイモ貯蔵穴が多数認められた。遺物が伴う土壌は3ヶ所で、集落と同時期の土器が出土した。

## 調査のまとめ

笠ヶ谷戸遺跡で今回調査された住居址は8軒で、前年調査分を加えても、現段階で遺跡について述べることは差し控え本報告にゆずるが、今後の課題としての知見を整理してみたい。

### 集落

昭和52年の調査を含めて古墳時代住居址11軒が調査されたが、和泉期に限定された集落であることが特質といえ、西富田二本松遺跡（注1）、西富田新田遺跡（注2）、夏目遺跡（注3）などと笠ヶ谷戸遺跡は性格を同じくする遺跡であるといえよう。11軒の住居址のうち、カマドをもつ住居址は1軒のみで、住居址にカマドを構築するのは早い段階で県北地域に導入され（注4）るとされている現段階では興味あることであると考えられる。

昨年調査の笠ヶ谷戸遺跡3号住居址の炉址から、焼成粘土塊（注5）が検出され、雌濠遺跡1号住居址では炉址にかかった異形壺形土器の口縁部（注6）が検出され、今回の調査でも58街区1号住居址50街区3号住居址などで焼成粘土塊断片が検出され、炉からカマドに発展的段階を示す資料と考えている。

昨年、今年度の調査を総括的に見て、後述する中世河川跡以西、以北は粘土質土に覆われ遺構の検出もなく、集落の中心は現笠ヶ谷戸集落にあると考えられる。

### 出土遺物

今回は50街区3号住居址のみを取りあげたが、この時期の土師器については、近年調査例が増加しているとはいえ、多分に問題を残しており、住居址の構造との関連をもたせた編年の究明が必要となり、今後予定されている調査区域、ほぼ同時期とみられる雌濠遺跡調査に期待がもたれよう。

### 河川跡

笠ヶ谷戸遺跡では、直接古墳時代集落とは、かかわりをもたないが、中世河川跡が重要な課題となっている。古墳時代住居址を破壊した河川は、ほぼ流路を変更せず、埋没しながら明治9年地租改正時に作成された地籍図に記載された水路に移行し、現在の地籍図にも水路として図のみであるが残存している。この河川跡を中世児玉党の居住地域である九郷用水々系とのかかわりを考えるとき、中近世に於ける歴史的意義は大きいと考えられる。（長谷川）

注1 『本庄市史 資料編』市史編集室 昭52 本庄市

注2 『西富田新田遺跡』菅谷浩之 昭47 本庄市教育委員会

注3 注1に同じ

注4 『畑中遺跡』畑中遺跡調査会 昭54

注5 昭和55年度報告書刊行予定

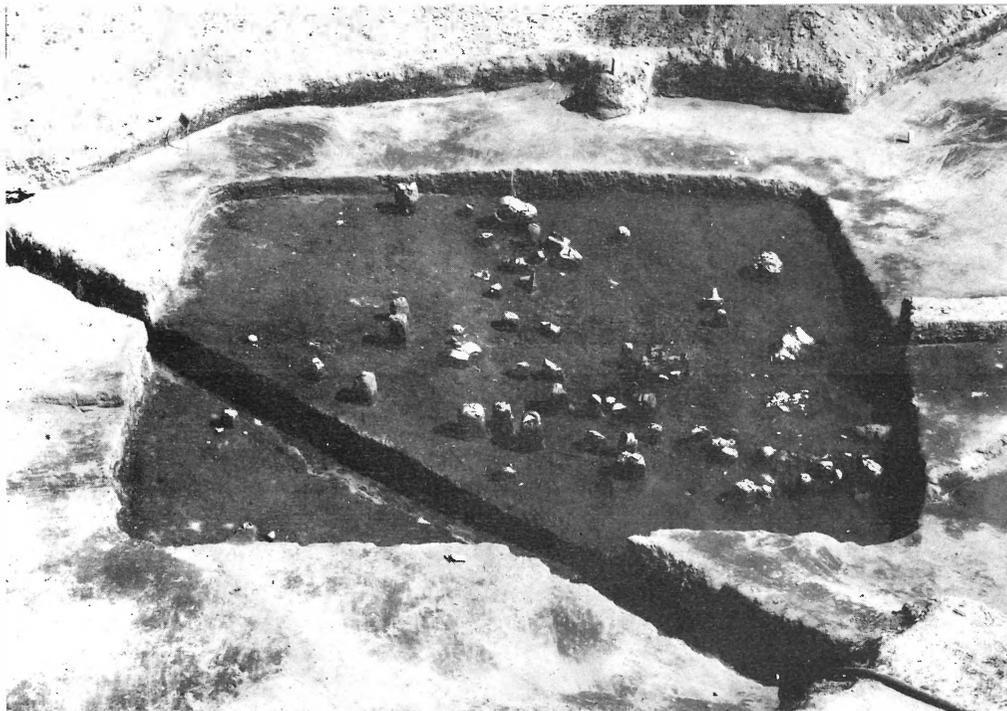
注6 注5に同じ



調査区域 空中写真



50街区1号~4号住居址空中写真



50街区3号住居址全景



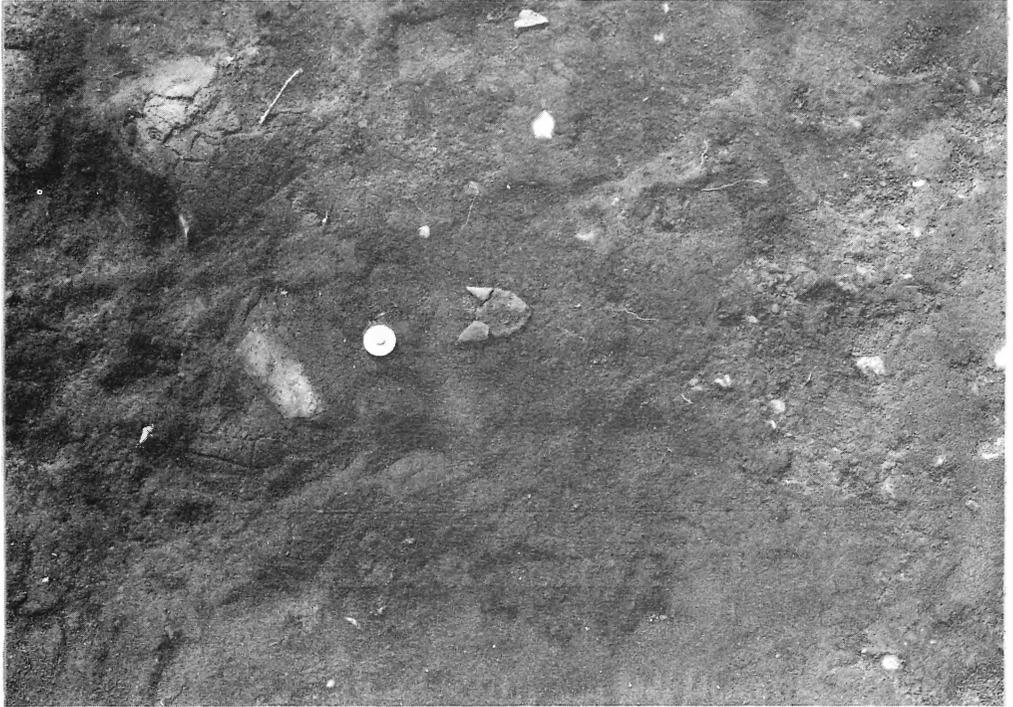
50街区3号住居址 土器出土状況



50街区3号住居址 土器出土状況



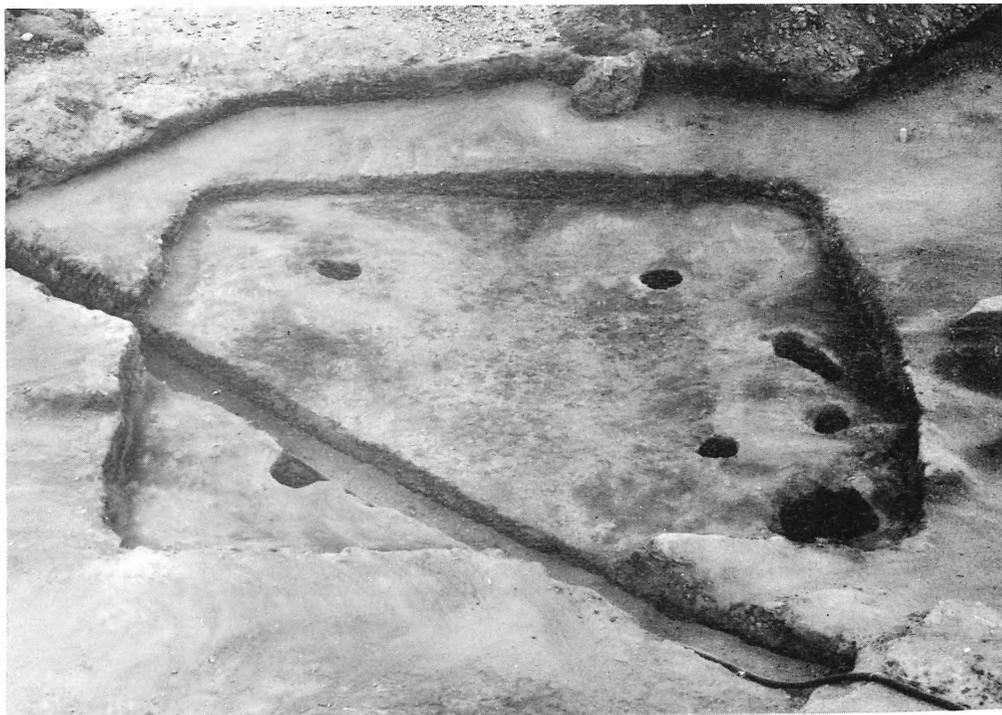
50街区3号住居址 土器出土状況



50街区3号住居址 鉄鏝出土状況



50街区 3号住居址 三和土状況



50街区3号住居址全景



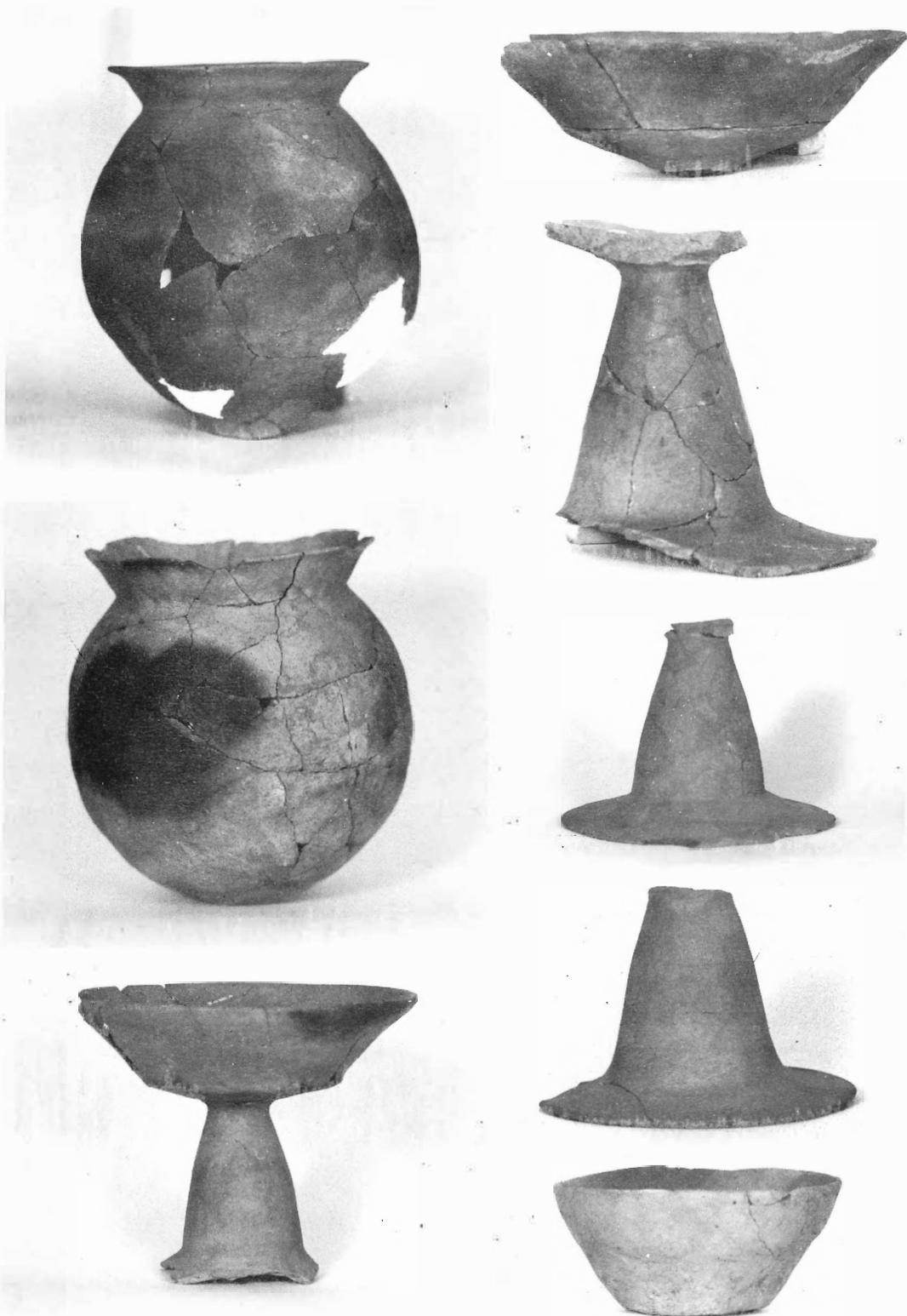
調査風景



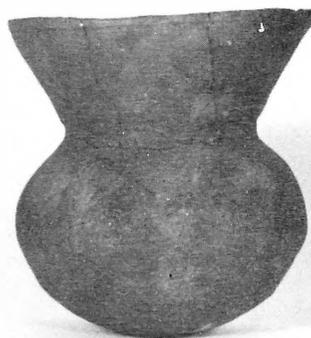
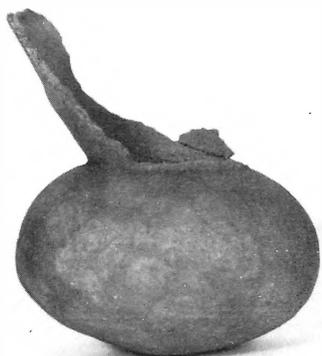
調査風景



調査風景（河川跡）



50 街区 3 号住居址出土遺物



埼玉県本庄市

女堀遺跡群発掘調査概報

昭和54年3月25日印刷

昭和54年3月30日発行

発行 本庄市教育委員会

本庄市銀座1-1-1

印刷 本庄孔版社

本庄市朝日町3299